
転生して異世界廻り ~ FAIRY TAIL 編

黎白

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生して異世界廻り〜FAIRY TAIL編

【Nコード】

N2247BA

【作者名】

黎白

【あらすじ】

転生して異世界廻りシリーズの第二作目。D・C・？の世界の後に、フェアリーテイルの世界へ行った蒼影の話。

原作崩壊やハーレム、チートあります。

更新は不定期になります。

プロローグ（前書き）

楽しんでもらえたら嬉しいです。感想やメッセージ待ってます。

プロローグ

ここは……。こんな空間一度しか見た事ないし、一度みたら忘れられないって。

俺が転生する時に来た場所だ。という事は……。ああ、そうだ。俺は死んだんだったな。しかも事故で即死。力でも使えば良かったのに、そんな事考える前に体が動いてしまった。

今回は特典の意味なく一人かなあ。俺が死んだのは30歳くらいだし、みんなまだ綺麗でモテてたからなあ。他に好きな人くらい出来るだろうしな。

俺は結局一人を選ぶなんて出来なかった。みんなはそれを認めてくれたし、初めは社会的には駄目だったが、途中から一夫多妻になったんだよな。

そいえば、みんな幸せだったのかな？まあ済んだ事だし、次の世界に行くとするか。

そいえばまた転生だけど、夕紀のやつ呼べば出てくるか？

すうー

「おい！夕紀いー！」

ドカツ

「叫ばなくても分かるわ！」

「痛い……。殴らなくてもいいだろうが。」

いきなり現れた夕紀に頭を思いつきり殴られてしまった。夕紀は女だけど、神様が訳でハンパなく痛かった。

「まあいいけどさ。で、早速次の世界に行きたいんだけど、どうしたら良いんだ？」

「まあ、少し待て。人を待たないといけないからな。」

こんな所に来れるのなんで、神様くらいじゃないのか？それが、俺と同じ転生者か。

「人って誰なんだ？」

「

「後での楽しみだ。別にお前にとって悪い事ではないから、安心していいぞ。」

「ならいいけどさ。」

俺にとって悪い事じゃないって事は、やっぱり別の神様とかか？

他の転生者は悪い事ではないけど、時には悪い事になりそうだし。

まあ、後で分かるんだしいいか。

なら、次に行く世界でも考えておくか。ゴッドイーターもいいし、スタードライバーとかもいいかもしれないな。フェアリーテイルも

悪くないな。

D・C・？の世界では基本平和だから、力を使う事なんか滅多になかったしな。

まあ平和が一番なんだけど、折角ならちゃんと使ってやりたいしな。いろいろ作ったのはいいけど、結局使えなかったりしたからな。まあ転生の時に貰ったやつを別荘代わりにして、息抜きとかと一緒に試したりはしたけどな。

「ん、やつと来たみたいだぞ。」

「やつと来たのか？結構遅かったな。」

「いろいろやる事があったんだろう。お前の後ろにいるぞ。」

なんで待たされたのかや、誰に待たされたのかも知りたいし、夕紀に言われて後ろを向くと、そこにはD・C・？の世界でこんな俺を愛してくれて、俺が愛した人達が全員いた。

一つ違うのは、最後に見た大人の姿ではなく、学園生活を楽しんでいた時の姿だった。

どうしてここに……。浮かぶのはただそれだけだった。

「どうしてって、お前が望んだ事だろうが。もう忘れたのか。」

「でも、あれは……。」

あれは最終的に愛し合っていたらであつた。もしそうなら、俺が死んだ後も……。

「そうだったの。全員がお前が死んだ後も想い続けたんだよ。正直驚いたぞ。」

「どうして……。」

「そんな事決まってるよ、蒼影君。ボク達は、蒼影君以外愛したりしないよ。」

みんなを代表してか、さくらがそう言う。その言葉にみんなが頷いている。

嬉しい……。ただそれだけだ。

みんなには俺を忘れて、幸せになつてもらいたいと思つたけど、心のどこかで一緒に居たい。他の人に渡したくない。そう思っていた。醜い独占欲だけだな。

「さて、説明は全員聞いてるだろうが、どうする？このまま記憶を無くし転生、まあ普通の状態だな、それが蒼影と一緒に生きて行くか。」

「そんなの決まってるさ！ナツミ達は、リュウツチと一緒に生きるさ！」

「だが、いいのか？中には、人を殺さなければいけない世界もある。」

そうだ……。俺は途中夕紀に呼ばれ覚悟を決めた。でもみんなはそうじゃない。普通に暮らしていたんだ。人を殺すなんて出来るはずがない。

一度別荘を使い、みんなを試した事があった。その時はみんな吐いていた。その時人を殺す俺の姿を見ても、俺の事は嫌いにならなかったが、殺すなんて別問題だ。

「そんな覚悟してるわよ。あたし達は蒼影と生きるんだから。」

まゆき先輩……。

「…………、その覚悟本物みたいだな。心から覚悟しているし、それならいい。」

「少し待ってくれ。」

ついて来てくれるのは、嬉しいけど。

「それでいいのか？ 実際、別の世界ではあまり全員で過ごしたり出来ないぞ。そりゃ別荘あるし時間は短いけどさ。」

そう、一度に過ごすのは二、三人。多くても、六人だ。

「別にいいですよ。蒼影なら、平等にしてくれるっすから。」

「そうですよ。影兄はなんだかんだで時間取ってくれますから。」

「そりゃ、出来る限りはするさ。」

「なら、ボク達は大丈夫だよ、蒼影。」

はは、恥ずかしいけど泣きそうだ。いろいろと力を作った中に、嘘に敏感になるのとかあるから、本当に愛されてるのが分かる。

「さて、話はまとまっただな。」

「ああ、悪いな。」

「別にいいさ。ああ、次の世界だが悪いが決まってるから。」

「どうしてだ？」

「イレギュラーだよ。フェアリーテイルの世界に行ってもらう。」

「みんなは大丈夫なのか？」

みんなは魔法なんて知らないだろうし、力もない。俺があげれるんだろうけど。

「大丈夫だ。知識は与えるし、ちゃんと力も与えるからな。足りなかったら、蒼影が与えたらいい。」

「わかった。」

「そうそう、藍、まひる、美夏、美秋に関しては人間の体を与えてるからな。」

「そこまでしてくれたのか。ありがとう。」

これでまひるに藍、美夏に美秋は人間と同じか。よかったな。

「気にするな。後は……………、誰を連れて行く？」

誰をかか……。二、三人くらいがいいか。なら……………学園生活でイタズラとかでも罨とか凄かったし、鈴花とそれを回避してたまゆき先輩か。後は、ナツミかな？

「そうだな。ナツミ、鈴花、まゆき先輩、お願いしていいか？」

「おつ、あたし？もちろん、いいよ。」

「わかったのさ！」

「了解つす。」

「まあ、たまには変わって貰うけどな。」

「なら送るぞ。力は、知識として入るから。後は、離れても念話みたいのが出来るアイテムつけてやるよ。」

「ありがとうな、夕紀。みんなも本当にありがとうな。」

みんな笑っていた。フェアリーテイルの世界でも、幸せに出来ればいいな。

訓練（前書き）

さっき発売してるの全部買って読みました。少し聞きたい事あるの
で、後書きみてください。

訓練

周りを見渡すと、一面木だけしかなかった。森の中……か？うーん、まあ夕紀がくれた魔法を使いこなすためには丁度良いな。周りに人は居ないし、怪我させなくてすむな。

他にこれからどうするか考えないとな。さてと、まずはもらった魔法の確認だな。俺がもらったのは……霸天竜の滅竜魔法？

霸天竜ってのは神界の竜みたいだな。てか、滅竜魔法ってそれだけでチートっぽいのに神界の竜ってなんだよ。

「ん……、ここは？」

「まゆき先輩、起きたのか？」

先輩やさん付けは一緒に暮らしてたけど、結局取れなかったんだよね。呼び方は学園の呼び方か下の名前になっただけだしな。みんな納得はしてるみたいだけど。

「蒼影？」

「ああ、ちなみにここは転生先の森みたいだ。」

「なんでそんな所に？」

「さあ？ただ夕紀にもらった魔法を使いこなすためには丁度いいと思うけどな。」

「確かにそうね。なら、ナツミと鈴花を起こさないと。話し合いも出来ないわよ。」

「なら、ナツミを頼む。俺は鈴花を起こしておくから。」

「わかったわ。」

まゆき先輩居て助かったな。まゆき先輩は結構しっかりしてたし。

その分デレた時はギャップでヤバいんだよな。

「おい鈴花、起きろ。」

「ふぁ…………、一体なんつすか？」

「さっき話してただろうが。転生して着いたんだよ。」

「ここがフェアリーテイルの世界っすか。」

「確か、魔法がある世界だったわね。」

「そうなのさ。後、名前もナツミみたいに外国と同じなのさ。」

後ろにナツミとまゆき先輩がいた。起こしてくれたみたいだな。そ
えば、D・C・?にはフェアリーテイル無かったような。何で三
人しってるんだ？魔法ならまだ分かるが、名前なんて分からないだ
ろうし。

「なあ、何でこの世界について知ってるんだ？」

「あの神様のおかげですよ。」

「というより、自分が話してたじゃない忘れたの？」

「ああー。確かにそんな事行ってたな。」

確か魔法と知識って言ってたな。知識って魔法の方と思ってたよ。

「じゃあまずは名前っすね。名前はどっするっすか？」

名前か……。ナツミは良いとして、俺達はこの世界ではおかしいからな。ただ名前逆にしたりすると、違和感あったり面倒だしな。

「別にそのままでもいいんじゃないの？どうせ変えたって違和感があるし。」

「そうっすね。ただ名字は前の名字に戻した方がいいっすね。」

一応結婚したから、名字は全員波柳になってる。まあ、新しい法律では名字は二つの内どちらでも良かったんだけど、みんな波柳を名乗っていた。

「そうだな。全員が同じ名字ってのはな。」

「あたし達はどうせ名前呼びっすけどね。それより、これからどうするっすか？」

「やっぱりあの神様がくれた魔法を使いこなせるようにしないと。」
「それより何でこんなに小さいのさ？」

今の俺達はナツミの言う通り、体が小さくなっている。後、三人は話し方とか体に引つ張られてるみたいだ。

「さあ？原作とかに介入する為じゃないのか。」

「それなら大きくなるまでには、魔法も使いこなせるでしょうしね。」

「なるほどなのさ！」

「そうだ、これ渡しておくよ。夕紀が通信ようだってよ。他のメンバーにも送られてるから。」

「これって……。あの時計っすか？」

「それって昔に蒼影がくれた時計？」

夕紀が連絡用に渡した物は、よく見たら俺がみんなに渡した時計だった。

「確かにそうだな。よく分かったな。」

「あたし達みんなわかるわよ。蒼影が作ったって聞いた時驚いたし、ずっと使ってたからね。」

「大切にしてたんだから忘れるわけ無いのさ。」

そこまで大切にしてくれてありがたいな。

「ありがとな……。そうだ、その時計は転生する時も無くならない

らしいから。」

「良かったのさ。」

「そうっす。他のメンバーでギルド作らないっすか？」

そんな話を話してたら、急に鈴花が言い出した。

「ギルドを？何でだ？」

正直ギルドを作る意味がないと思うんだが。

「ギルドを作れば、他のメンバーに作ってもらったら、お金も貯まるっすし身分もあるから、いざという時に助けられるっすから。」

「それもそうね。音姫にマスターを任せたらいいかもね。生徒会でもよくまとめてたし、杏もいる事だしね。」

「そういう事っす。まあ、今は名前とかくらいで正式にはもつと経たないといけないっすけど。」

それはいいだろうけど、ギルド作ったり、マスターとかって大丈夫何だろうか？まあ、また別世界って事でなんとかなるのか？

そうだな……。そうなるとちよくちよく会いに行くか。

「なら、そうするか。」

別荘組は年齢とかは学園の時みたいだし、原作少し前にまた連絡して作ってもらったらしいか。

「なら、連絡するから。少し待ってて。」

「了解。」

やっぱり頼りになるな。一人だったらギルドに入る事しか考えなかったしな。

「蒼竜、音姫達もいって言ったわよ。」

「早いんだな。ギルド名とかは決まったのか？」

「ええ、向こうも似たような事を考えてたみたいよ。だからギルド名考えてたらしいわ。」

「そうなんだ。何て名前なんだ？」

「蒼竜の影《ブルーシャドー》らしいわ。ソウエイの名前からみた
い。」

蒼竜の影《ブルーシャドー》正直単純だな。しかも竜どこに行ったんだ？

「それでいいんじゃないっすか？」

「いいと思うのさー！」

「みんながいいなら俺はいいけど。」

「ギルド自体は魔法使いこなせるようにしたら、作るみたいよ。」

「なら、次はあたし達の魔法確認しないっすか？お互い知ってた方がいいっすよ。」

「それもそうだな。」

「なら、ナツミからなのさ！ナツミは写真実現《スクープ》なのさ！」

……うん、名前からしてナツミに丁度いいな。内容はわからないけど。

「どんな魔法なの？」

「簡単なのさ。ナツミが撮った写真を一定の時間実現させるのさ。ただ、写真は一回使うとなくなるし、撮って時間が経つと意味ないみたいなのだ。」

チートだな。でもこの世界でカメラってあったか？

「ちなみに、カメラは何故あるっすよ。はい、ナツミ。確かに渡したっすよ。」

「サンキューなのさ！」

「チートだな。えっとじゃあまゆき先輩は？」

「あたしは普通みたいね、風の魔法よ。風帝の領域って名前みたいね。」

「そうな「ただ消費魔力はほとんどゼロで範囲も広いみたい。後は、範囲内の風魔法吸収みたい。」普通か？」

「次はあたしっすね。」

多分チート何だろな。まゆき先輩の消費魔力ほとんどゼロに風魔法吸収って結構卑怯だな。

「そうなのさ、鈴花の魔法はなんなのさ？」

「あたしは、罫製作《トラップマスター》っす。」

ああ、鈴花はなんとなく分かるかも。D・C・？でも対生徒会にいろいろ作ってもらったしな。

「これは罫をすぐに作れるみたいっす。使い方では遠近どちらでも使えるっすし、敵の感知にも使えるっす。」

「みんな使い方次第では使える物ばかりね。で、あれだけチートとか騒いでた蒼影はなんなの？」

「どうせ蒼影の事っすからチートになるっす。」

「リュウツチだしあり得るのさ。」

俺だからって酷いんじゃないか？何も聞いてないのにさ。

「霸天竜の滅竜魔法……。魔力込められてたら、何でも喰えるらしい……。」

「やっぱりあたし達より蒼影の方がチートじゃない。ねえ、鈴花、ナツミ。」

「そうっすね。」

「ずるいのさー。」

「っつぐ、その通りだけどさ。」

「まあ、いいわ。なら、早速特訓と行くわよ。」

「「「了解なのさ（っす）。」

まあいいや。この世界は争いもあるし、みんなを守れるようにならないとな。

訓練（後書き）

原作で天狼島の話終了後、七年って……。

聞きたいのは、原作道理にするかです。まあ、そこまで行くのに何年掛かるか分からないけど……。

正直、主人公の能力あつたら、何とでもなるんですよ。でも、それだと初代マスターとかいろいろ問題出るだろうしな。

天狼島は原作のままか、オリジナルにするかどっちが良いでしょうか？オリジナルなら案とかあつたらお願いします。

協力お願いします。

マカロフとの出会い（前書き）

今回はかなり原作が変わっていると思います。

マカロフとの出会い

そろそろまゆき先輩達戻ってくるか？今、まゆき先輩達は魔法の練習に行ってるんだよな。ちなみに、大分使えるようになってる。

「ただいま、蒼影。」

「おかえり、メルディ。」

戻ってきたのは、メルディだった。メルディは原作では、悪魔の心臓《グリモアハート》に襲われた町の生き残りで、ウルティアに拾われるんだけど、偶然そこに作った技能を試すために行っただよな。

で、原作より敵が減るならとかいろいろ有って、俺が保護したんだよな。後は、俺に懐いてくれてるし、多分異性としても好きなんだと思う。これはまゆき先輩達に言われて気付いたんだけどな。一応メルディには転生やらの事教えてるんだけど、それでも良いって言ってくれてる。

てか、何度経験しても受け入れられた時は嬉しいな。

「で、どうだった？」

「使いこなせるようになったよ。」

「そっか、頑張ったな（ナデナデ）。」

「／／／／」

使いこなせるようになったのは、原作と同じマギルティ・ソドムとマギルティ・センスを教えたからだ。まあ、マギルティ・センスは少し手を加えて、共有ではなく、自分と同じ痛みを与えるだけだな。じゃないと、相手が死ねばメルディも死んでしまうし。

後、技能作成《スキルメイク》で風力加工《エアアート》を作り、技能渡し《スキルフィード》を使ってメルディに渡したな。

流石にあの二つだけだと心配だし。他の原作でメルディが使ってた魔法は知らないしな。

ちなみに、技能渡し《スキルフィード》は作った技能を他人に与える事が出来るので、渡した技能は消えない。

てかフィードって与えるって意味が有ったはずだし、いいよな。

「蒼影、戻ったのさ！」

ナツミ達が帰ってきたみたいだな。

「メルディも帰ってきてるみたいね。」

「蒼影は何してたんっすか？」

「俺？またいろいろ作ってたよ。重力操作に入れ換えの魔法とか。後、魔力分解。」

「またっすか？全部覚えてるんすか？」

「いや、だから技能目録《スキルブック》作ったんだし。」

思い付いたら作ってるしな。よく使うの以外は覚えてるわけ無い。

「そうだったすね。そいえば、誰かこの森に入ってきたみたいっす。」

「侵入者？蒼影、排除してくる？」

「いや、大丈夫だよ、メルディ。」

メルディはまだ小さいし、対人は難しいだろうしな。それに、侵入者って……。別に俺達の森じゃないんだし。

「それにこつちに来てるみたいだからな。」

一応探索用の技能を二つ使ってるしな。

「そうなのさ？」

「ああ、多分、そろそろ来ると……。。」

「子どもじゃと！？」

近くの茂みから出てきたのは、小さな老人だった。まあ、フェアリーテイルのマスター、マカロフなんだけどな。しかし、こんな所で出会えるとは思ってなかったな。

でも、ちょうどいいか？魔法は俺もメルディやまゆき先輩達も使いこなせるようになったし、マカロフだって子どもだけでいたら保護

しようと思っただろうし。

「どうしてこんな所に……。」

「蒼影、どうするっすか？」

「保護してもらおうと思ってるけど？フェアリーテイルのマスターだし、ちょうどいい。メルディ達もいいか？」

「蒼影がいいなら、私はいい。」

「あたしもいいよ。」

ナツミと鈴花も頷いてるし、大丈夫だな。

「お主ら、何をしておるのだ？親はどうした？」

「親はいない。だから、ここで暮らしてたんだ。そういう爺さんは？」

「ワシか？ワシはマカロフ。フェアリーテイルというギルドのマスターじゃ。今回は依頼が合って森に来たのじゃが、お主らは？」

依頼か……わざわざマスターが出てくるって事は、評議員にでも直接頼まれたか？フェアリーテイルは評議員に嫌われてるみたいだし。

「俺は波柳 蒼影。蒼影って呼んでくれ。んで、こっちはメルディ、鈴花、ナツミ、まゆき先輩だ。」

「ふむう……。お主ら、ワシと来んか？ガキだけで生活するのも大

変じやろつ。ギルドには同じくらのヤツもいるからのつ。」

相手から言ってもらえて良かったな。それにしても、上手く行き過ぎじゃないか？まあ、楽に進むんならいいけどさ。

「いいのか？もしかしたら敵かもしれないけど。」

「敵はそんな事言わんわい。それに、人を見る目はあるわい。」

「…………、なら世話になるよ。よろしくな、マスター。」

「うむ、着いて来い。ギルドに案内するでしょうかの。」

これで原作には介入出来るな。それに漫画やアニメのフェアリーテイルの空気は好きだったし、楽しみだな。

後、家買わないとな。幸い、D・C・？の世界で買い溜めた宝石あるし、なんとか買えるだろう。子どもだから駄目なら、マスターに頼めばいいし。

「蒼影…………。」

ギルドに行くのが心配なのか、メルディが服を引っ張ってきた。メルディこんなキャラだったか？

「心配すんなって、メルディ。別に俺はいるんだしな。（ナデナデ）」

「……………うん。」

可愛いなあ。若干まゆき先輩達の目が痛いような気がするけど……。

「そいえば、マスターは何でここに来たのさ？」

「依頼と言わなかったかの？」

「内容の事を聞いてるんっすよ。」

それは俺も気になるな。マスターが来るくらいの依頼ってどんな内容だろ？

「評議員から少しな。討伐の依頼じゃよ。まったくギルダーツがあれば……。」

ああ、ギルダーツがいないからマスターが来たのか。

「大変みたいね。蒼影も入るから、もっと大変になりそうだけだね。」

「まゆき先輩の言うとおりっすね。蒼影抑えるっすよ。」

マスターに聞こえないように言ってくる、まゆき先輩と鈴花。失礼なやつだ。」

「いや、あつてと思うのさ。」

「あれ？」

「声に出てたわよ。」

「マジか。てか、そのとおりって……。」

そんな苦労掛けてるか？

「蒼影は優しいから大丈夫。」

「ありがとな。」

でも、それはフォローになってないと思うぞ、メルディ。まあ、優しいってのは結構嬉しいけど。

「お主ら魔法は使えるのか？」

やっぱり聞くよな。あんな森で住んでたんだし。まゆき先輩、ナツミ、鈴花、メルディは答えたみたいだな。まあ、どんな魔法かは教えてないみたいだけど。

俺は教えた方がいいのか？やっぱりフェアリーテイルにはナツがいるし、滅竜魔法が使えるってのは言った方がいいか？

いや、どうせフェアリーテイルに言ったら喧嘩売られそうだし、お楽しみって事で内緒にしておくか。そっちの方がなんか面白そうだし。

「俺は一応使えるよ。」

「ほう、そうか。そうじゃ、今日はここに泊まるからの。」

「ああ。」

フェアリーテイルにはどれくらいに着くんだろっな。

マカロフとの出会い（後書き）

今回はメルディがグリモアハートに入るの阻止しました。まあ、描写はないですけど。過去話みたいにかくかもしれませんけど。

後、最近あまり書けなくなってきた。少なくとも一話、三千文字書いときたいんですけどね。

フェアリーテイルへ

森から出て一週間。ようやくフェアリーテイルに着く事が出来た。まあ、途中少し寄り道が有ったから遅くなっただけだな。ちなみに、少し前に俺達は十二歳なった。メルディがちょうど三日前に誕生日だったんだよな。

「ここがワシらのギルド、フェアリーテイルじゃ。」

そこには、新しくなる前のフェアリーテイルがあった。やっぱり原作の景色見るのは嬉しいな。

「楽しみつすね。」

「ああ、そうだな。」

ただ、中から聞こえる喧嘩みたいな声がすんなって不安なんだが……。

「今帰ったぞ。」

そう言つてギルドに入るかマスターの後を着いていく。中には、原作より若い原作キャラがいた。

「おい、今なんつった、ナツ！」

「なんだやんのか、グレイっ！」

「上等だっ！やってやろうじゃねえかつ！」

「後悔すんじゃないぞ、この野郎っ！」

さっきの喧嘩はナツとグレイだったみたいだな。というか、上半身裸の男とマフラーをしている男って……。真反対だよな。

「あれ、止めなくてもいいのさ？」

「気にせんでいいわい。それに、エルザが止めるじやろう。」

エルザか……。でも、この時期エルザはミラとよく喧嘩してたし、逆に酷くなるんじゃないか……。

「やめないかつ！ ナツ、グレイっ！」

マスターの言ったとおり、緋色の髪をした少女……。まあ、エルザなんだけど。が止めに入った。

「なんか少し麻耶に似てない？」

「まゆき先輩も思った？」

まゆき先輩の言うとおり、二人の喧嘩を止めるのが、三バカを止める麻耶に被ったんだよな。委員長っぽい所とか。まあ、麻耶は実際委員長だったんだけどな。

「「ああ？」」

「うるさえな、エルザ！ なんだ、やんのかっ！」

「なんなら、お前からやるってのか!？」

やっぱり止まらないよな。原作ならまだしも、まだガキだしな。

「蒼影、大丈夫なの? あれ。」

メルディも自分が入るギルドだからか心配なんだろう。俺に聞いてきた。

「ああ、見てなつて。」

「「ゴホッ……。」」

「本当だ。」

しかし一瞬つてのは凄いな。

「エルザが帰ってきたって? この前のつづきだ。かかっておいで。」

「なんかまた始まったみたいね。」

「そうっすね。あれは多分やるっすよ。」

多分鈴花の言うとおりになるだろうな。しかし、やっぱりミラで性格違うよな。

「ミラ、そういえば決着がまだだったな。」

てか、飛び交ってる言葉が女の子としてかなり不適切なんだけど…。被害もナツ達より酷いし。

「風力加工《エアアート》、風壁。」

こっちに飛んでくる物をメルディが防いでくれる。

「ありがとうな。」

「蒼影の為だから。」

ちなみに、鈴花とナツミはまゆき先輩が防いでいる。

「エルザのやつ、あれで俺らに喧嘩するなって言っただからなあー。」

確かに。 그레이の言うとおりだよな。

「くっそー、エルザもミラもいつかぶったおしてやるっ!」

今のままだと、ナツには無理だろ。

そろそろマスターが止めるみたいだな。

「ええいつ、やめんかエルザにミラジェーン!」

「っ!」

マスターの近くにいた人が、マスターの事が大きすぎたのか、耳を押さえている。俺達は、メルディ、まゆき先輩の魔法で風を操ってるから平気だ。

「マスター、おかえりなさい。」

「帰ってきたんですね。」

「仕事お疲れさまです。」

やっぱり人望はあるな。てか、なんで入ってきた時に気付かないんだよ。

「あれ？マスターその子達だれ？」

俺達に気付いたりサーナが声をかけてくる。

「おお、そうじゃ。この子らはの、今日からこのギルドに入る子達だ。」

「波柳 蒼影。よろしくな。」

「ナツミ・キャメロンなのさ！」

「高坂 まゆきよ。よろしくね。」

「深倉 鈴花っす。」

「メルディ。」

「弱そうなヤツだけど、お前、強いのか？」

いきなりだな。いつの間にか近付いてきたナツが俺に声をかけてくる。

って！

「メルディ、抑える抑える。」

メルディが俺を貶されたからか、マルギティ・ソドムを使おうとする。

「でも……。」

「そうじゃな、ならナツ、蒼影戦ってみるがよい。」

「あたし達はいいの？」

「うむ、蒼影が強ければ、お主らもそれなりではあるじゃろうしな。」

「よっしゃ、なら、行くぞ！」

マスターに促されて、ナツと他のギルドメンバーが外に出て行く。
なんかエルザとミラ、ラクサスからの視線が強かったけど、何でだ？まさか、戦いたいと思っただろうな？

「さて、準備はいいな？」

「ああっ！」

「いいすよ。」

ギルドから出て、ナツと向き合う。周りには他のギルドメンバーがいて、鈴花達はギルドメンバーから少し離れて見ている。

「では、初め！」

「行くぞ、火竜の…咆哮！！」

マスターの合図と同時にナツが俺に攻撃を仕掛ける。俺は、その魔法を避けずに当たる。

「なんだよ、やっぱり弱いじゃないか。」

「期待して損したな。」

……わざとだけど、ムカつくな。というか、なんで俺よりメルディがキレてるんだよ。今は、まゆき先輩が押さえてるみたいだけだな。さて、ちゃんとやるか。

「なんだよ、じっちゃん。弱いじゃないか。」

「あのさ、ちゃんと敵は最後まで見とかないと。」

倒したと思って油断して、倒されるとか洒落にならないしな。

「「な!!」」

ナツだけでなく、観客も驚いている。驚くには早くないか？

「んじゃ、次はこつちな。霸天竜の氷弾。」

腕に氷を纏い、弾丸として飛ばす。

「な！？火竜の鉄拳！」

それはナツの火で蒸発する。まあ、わざと蒸発しやすくしたんだけど。

「どこだよ!？」

見えなくなったからか、ナツ焦ってるな。まあ、いいや。

「これで終わりな、霸天竜の雷槍。」

水蒸気で見えなくなっているナツの後ろに周り、雷の槍を打ち出す。

「グアッ！」

ナツはモロにくらい、気絶する。やっぱりというか、観客は皆驚いてるな。

「マスター！」

「あ、ああ。勝者、波柳 蒼影!!」

ウワアアアッ

観客の歓声が聞こえる。それと同時に、エルザ、ミラ、リサーナ、レビィ、グレイ、エルフマンが近付いてくる。

あれ？レビィってギルド加入もつと遅くなかったか？まあ、早くいるならその分仲良くなれるし、別にいいけど。

「蒼影、お主滅竜魔法が使えたのか！？」

「まあね。」

「なんの竜なの？」

「えつと……。」

名前は分かるけど、いきなり名前を言うのはおかしいな。

「リサーナだよ。リサーナ・ストラウス。」

「私は、レビィ・マクガーデン。よろしくね。」

「波柳 蒼影だ。よろしくな。で、なんの竜か。霸天竜ってので、魔力があれば大体は食えるぞ。」

「「凄……。」」

「「おい、私（俺）と戦え！」」

後ろにいた、ミラ、エルザ、ラクサスにそう言われた。

……もしかして連戦ルート？

バトル

「おい、私が先に戦うんだよ。」

「いや、私が先に戦おう。」

「何言ってるんだよ。俺に決まってるだろうが。」

俺の前で、三人が誰が先に俺と戦うかで揉めている。フェアリーテイルって戦い好き多いよな。

ま、いいか。重力操作も使えばどうにでもなるし。

「あんた、やるよ。」

お、決まったみたいだな。

「あんたが一番？」

「そうじゃ、一番がミラ二番がエルザで三番がラクサスじゃ。」

「結局三人かよ。まあ、いいや。」

「私はミラジーンだよ。」

そう言ったミラの姿が変わる。なんかカッコいいな。俺も似たの作ろうかなー。

「サタンソウル、悪魔の力を身にまとう魔法よ。」

「初め！」

マスターの合図と同時に重力を操り。ミラの動きを封じる。まあ、動けなくなる程度だから、そこまで重くないだろうけど。

ミラジェーン side

波柳 蒼影。マスターが連れて帰ってきたやつらの中に一人だけいた男。他のやつらを見る限り、リーダーのようなやつだから強いんだろうと思ったけど、全くそうは思わない。

「弱そうなヤツだけで、お前、強いのか？」

ナツがそう言ったけど、多分他のメンバーもそう思ってるんだと思う。

そいつらは、ナツの発言はあまり気にせず平然としていた。

「そうじゃな、ならナツ、蒼影戦ってみるがよい。」

マスターの提案で、ナツとアイツが戦う事になった。周りはナツにすぐやられると思ってるみたいだな。まあ、ナツは私にはかなわないけど、それなりに強いからね。

「火竜の…咆哮ー!!」

戦いが始まってすぐにナツの滅竜魔法がアイツに当たる。アイツは全く避ける素振りもなく、ナツの魔法に当たった。

「なんだよ、やっぱり弱いじゃないか。」

「期待して損したな。」

周りの声が聞こえたけど、私は何故かそうは思わなかった。

「あのさ、ちゃんと敵は最後まで見とかないと。」

アイツは、ナツの攻撃なんて無かったかのように立っていた。

そして、ナツと同じ滅竜魔法を使いナツを倒していた。

そして、私とエルザ、ラクサスで誰と戦うかを決め、私が先に戦う事になった。そして、サタンソウルを使い戦おうとしたら、いきなり体が重くなり動けなくなった。

「重力操作、これで動けないはずだから、降参してくれない？」

アイツは私にそんな事を言ってきたけど、何もせずに降参なんか出来ない。なんとか身体を動かそうとしたら、少し動かせた。

え？軽い……。

急にさっきまでの重さがなくなっていた。これなら……。

蒼影 side

さっきまでミラにかけていた重力だと、動けないはずなんだけども。なのに、体を動かしていたから重力を戻してみた。

あれで終わるんならそれでよかったけど、せつかならちゃんと戦ってみたいしな。

「仕切り直しか。」

てか、初めから重力操作使わなかったら良かったかも。

「はあっ！」

ガンッ

ミラの攻撃が俺の腕にぶつかる。腕に岩を作る？まあ、腕を強化して防ぐ。

てか、音が体から出るわけない音なんだけども。

「霸天竜の岩針、風弾。」

近付いてきたミラの下の地面から岩を打ち出し、風を使い吹き飛ば

す。

流石にあれじゃ決まらないか。なら、接近戦でいくか？

「考え事なんて余裕ね、手加減でもしてるつもりなのっ！」

「んなわけないって。覇天竜の翼撃！」

魔力を込めた攻撃で地面に溝が出来る。手加減に関しては、あまり怪我させないようににはしてるから、手加減になるかもしれないけど。まあいいや。さっきの攻撃で作った溝にミラを誘導するか。ミラの攻撃を避けながら誘導するけど、流石にそこまでは注意してないのか、誘導されてるのには気付いてないな。

「っ！」

そして、溝に足を取られて、よろけたミラに攻撃する。

「これで終わりな。」

まあ、女の子の顔には攻撃したくないし、傷つけたくないから寸止めだけ。

「勝者、蒼影！」

「大丈夫か？」

さっき足を取られた時に捻ったのが、ミラが座ったままだったから、声をかけてみる。

「あ、ああ。イタッ。」

やっぱり怪我したみたいだな。直してやりたいけど、治癒魔法って確か失われた魔法だしな……。入ってすぐに見せたくないし。メルデイにも出来るだけ風力加工《エアアート》だけにしよう言っただけだな。

「しょうがないか。少し我慢しろよ。」

「な、なにっ。」

「じつとしてろって。」

足を怪我しているミラをリサーナやエルフマンの所に運ぶ。お姫様抱っこだから顔が紅くなってる。

「お姉ちゃん！」

「姉ちゃん！」

「少し見せてくれ。」

「あ、ああ。」

顔を紅くしながら、怪我をした足を見せてくれる。足は少しだけ腫れていた。

これなら氷でも当ててたら良くなるだろう。

「これで冷やしといたら大丈夫だと思うから。」

滅竜魔法を使って氷を作り渡す。周りには空気の膜を作ってるから、冷たくなって直接手で持てる。半分は膜がないから冷たいけど。

「ありがとう……。」

ミラはさっきまでの元気の良さが無くなってる。顔が紅いから恥ずかしいだけだと思うけど。

「てか、強いのは解るけど、女の子なんだしあんま無茶はしないようにな。後は、あんまり背負い込まないで、人を頼るようにな。」

ミラと戦っていて思ったんだけど、リサーナやエルフマンを守るために強くなるうとしてるのが、肩に力入れすぎに見えたしな。少し違うけど、一人だった時のさくらに少し似てたし。俺の勘違いかもしれないけど。ミラの頭を撫でながら、そんな事を考えていると、後ろからエルザの声が聞こえたから手を離す。

「あつ。」

ミラの名残惜しそうな声が聞こえるけど、無視する。このまま続けてたら終わらないし。

「やっときたか。」

戻るとエルザが待っていた。やっとって……。そこまで待たしてないと思うんだけど。てか、手合わせまゆき先輩達に任せたら良かった。

「つと！」

いつの間にか始まってたみたいで、エルザが斬りかかってくる。

「沈め。」

エルザの攻撃を避けて、剣にかかる重力を操作して地面に埋める。
かなり大きな重力かけたし、簡単には抜けないだろう。

「覇天竜の牢獄！」

魔法で作られた様々な属性の牢が降ってきて、エルザを襲う。

エルザは斬らずに避ける。斬りかかってくれたら捕まえて勝ちだったのに……。今のエルザに斬られるほど柔らかくないしな。

あ…………。

「蒼影、これを解かんか！」

何があったかと言うと、近くで心配をしていたマスターの上に牢が降っていて、マスターを閉じ込めていた。

…………面白いし、試合終わるまでこのままでいいや。

「天輪の鎧だ。もちろん周りの剣も使うからな。」

んー、一応魔力があるから剣も喰えるんだよな。その代わり剣は壊れるから、味方になるエルザに使えないんだよな。

「となると、落とすか。」

使われる前に重力で地面に埋め込んだら、操る事も出来ないだろうからな。

「なにっ!」

「これで周りの剣は使えなくなったな。」

「なら……。飛翔の鎧。」

飛翔の鎧によりスピードの上がったエルザが攻撃をしてくる。

「重力操作。」

「何っ!」

俺の周りに重力で壁を作り、攻撃を防ぐ。そして、エルザに雷槍を突き付ける。

それにしても、スピードを上げる魔法作ろうかな。

「勝者、蒼影。」

後は、ラクサスとの戦いか。ラクサスはエルザやミラより強いし、面倒だよな。

「つと。」

エルザがいなくなり、ラクサスを待っていると、急に雷が飛んでき

た。

「ラクサス！何をするんじゃっ！」

「うるせえな、早く戦わせろよ。」

「マスター、退いといてくれ。」

「蒼影もじゃっ！早くこれを解かんか！」

あ……。まだ牢有るままだった。

「悪い、今解いたから。んじゃ、始めるか。」

「やっとかつ！レイジングボルトッ！」

「霸天竜の雷陣！」

ラクサスの放った雷を自分の雷で消し、そのままラクサスに攻撃する。

「つく、俺の雷が破れただと。」

ラクサスは自分より年下に破れたのがショックだったみたいだな。別に破らなくても、喰らえばよかったんだけどな。

「レイジングボルトッ！」

「霸天竜の黒煙。」

ラクサスに向けて、黒い煙をだす。この煙の中では魔法が一切使えないんだよな。この煙が魔力を吸収するからな。もちろん俺には関係無いけど。

今結構ムカついてるし、早めに決めるか。理由？なんか今のラクサスって偉そうでムカつくじゃん。原作の後の方は好きだったけどさ。

「霸天竜の咆哮！」

ラクサスに向かってブレスを放つ。言っただかもしれないけど、霸天竜の咆哮は全属性が込められてるから、防ぎようがないと思う。一つの属性だと、弱点の属性が打ち消すしな。

結構範囲も大きくしたから、避けるのも間に合わないと思うな。

「レイジングボルト！」

ラクサスが攻撃したみたいだけど、威力は全く落ちずラクサスに当たった。

死なないようにしてるから大丈夫だけどな。

「蒼影よ、ラクサスは大丈夫なのか……。」

「ちゃんと加減はしているから。」

「なら、よいが……。」

これで全部終わりって事でいいのか？

バトル（後書き）

なんかミラとのバトルが……。そういえば、フェアリーテイルにレ
ビイが入るの本当はもっと後なんですよね。まあ、気にしないけど。

歓迎パーティー（前書き）

三作更新。

歓迎パーティー

「リュウツチ大丈夫なのさ？」

「ナツミ、蒼影が怪我するわけじゃないじゃない。」

「そうっすよ。今はまだ子どもなんっすから。」

なんか言い返したいけど、全部事実だしな……。俺が滅竜魔法のみで普通に戦って、傷が付くのはまゆき先輩達とこのギルドだと、マスターやギルダーツくらいじゃないか。まあ、もう少ししたらミラ達でも傷付くだろうけど。

「蒼影、ギルドに行くわよ。他の人達もギルドに戻るみたいだから。」

「ああ。そうだ。ナツミ、マスターやラクサス達の写真撮っておいたらどうだ？」

「もう撮ってるのさ。」

相変わらずナツミは行動が早いな。ちなみに、撮った理由は戦いよくだな。ナツミの魔法は生き物にも有効だし、マスターはもちろんラクサス達も結構強い方だしな。

「しかし、ギルドに入るのにあんなに戦わないといけないなんてな。」

「あたし達は戦ってないけどね。それに蒼影もそんなに疲れてない

「んでしょう？」

「いや、仲間になる人と戦うつてのは結構嫌だろ。それに精神的には疲れたぞ。」

「それなら大丈夫よ。そんな事より早く行くわよ。」

「そんな事って……。」

まあ、いいか。それより、まずはギルドに馴染まないとな。後、S級にもならないといけないな。

百年クエストとかああいうのにも出てみたいし、原作でギルダーツが行ったやつ以外になんか無いのか？無いのなら十年クエストとかに行ってみるか。

パンパンッ

『フェアリーテイルによっこそ！！』

ギルドに入ると、いつの間にか用意をしたのかパーティーっぽくなっていた。いや、本当いつの間にか用意したんだよ。

聞いてみたら、マスターが帰ってきた時にもう準備をしてたらしい。本当は時間ないから、出来なかったみたいだけどナツが喧嘩売ってきたから時間が出来たらしい。

わざわざありがたいな。

「よう、楽しんでるか、蒼影。」

「グレイ、俺のセリフ取るんじゃないやねえよ！」

飯を食ってたら、何故かグレイとナツがやってきた。喧嘩するなら二人で来なかったらいいのにな。

「「ガッ。」」

「喧嘩すんなって。で、どうしたんだ、火の滅竜魔導士に変態。」

二人にかかる重力を変え、喧嘩を止める。

「「く、くるしい。」」

「あ、悪い。」

あのままじゃ、ほとんど喋れないしな。二人にかかる重力を元に戻す。

「「いきなりなにすんだ！」」

息ぴったりだな。

「話しかけて来たのに、いきなり喧嘩を始めるからだろうがよ。」

「「悪い……。」」

「で、どうしたんだ。火の滅竜魔導士に変態。」

「俺はナツだ。ナツ・ドラグニエルだ。」

「変態じゃねえよ！」

「いや、パンツだけの人間は変態だろ。」

「いつの間につ！」

まあ、変態つてのはわざと言ったんだけどな。てか、女の前で裸つてのはやめろよな……。今はメルディ達がいらないからいいけどさ。

「俺はグレイだ。」

服を着てきたグレイが俺に自己紹介をする。

「それより！なあ、お前滅竜魔法使えるんだな！」

「まあな。ナツもなんだろ？」

「ああ！俺はイグニールから教えてもらったんだ。」

「イグニール？」

「ああ、こいつはドラゴンに育てられたらしいぞ。」

やっぱりドラゴンに育てられたんだな。原作で知っていても少し驚くな。

「でもさ、ドラゴンなのに滅竜魔法を？」

まだ原作はそこまでいってないし、本当不思議なんだよな。後、不

思議に思わないナツ達も。

「はっ！」

やっぱり、今気付いたんだな。何気にグレイも驚いてるのに驚いたよ。グレイも気付いてなかったんだな。

「まあ、いいけどさ。ああ、後、俺はドラゴンに育てられてないぞ。生まれつきだ。」

転生した時に貰ったんだし、間違っではないよな。

「そうなのか……。」

何も手掛かりが無いと知って落ち込むナツ。

「そう落ち込むなって。俺も探す手伝うからさ。」

「ありがとな。」

「で、グレイはどうしたんだ？」

「俺は楽しんでるかと思ったんだよ。」

「まあまあ楽しんでるよ。入る前にいろいろ有ったしな。」

ナツとの戦いだけじゃなく、ミラ、エルザ、ラクサスだからな。

「でも、凄いよな。ミラ達に勝っちゃうなんて。俺達なんて全然勝てないのにさ。」

「そう落ち込むなよ。勝てないなら、努力すればいいだろ。」

原作では結構強くなってたし、エルザにも勝てるようになるだろう。

「俺は少し回ってくるな。じゃ、グレイ、ナツ。」

メルディやまゆき先輩達何処だろうな。後、ギルドマークも入れて貰わないと。まだ入れてないしな。

「マスター、ギルドマークってまだ入れなくていいのか？」

カウンターで酒を飲んでいるマスターを見つけたから、聞いてみる。

「おおつ、忘れておつた。他の者も呼んでくれ。」

「忘れるなよな。」

まあいいや。えーと、何処にいるか分からないし、時計使うか。

『聞こえるか？』

『どうしたんっすか？』

鈴花はナツミと一緒にいたいだな。鈴花と一緒にナツミの声も聞こえてきたし。

『どうかしたの？』

まゆき先輩はメルディとか。

『マスターがギルドマーク入れ忘れてたから、今から入れるってよ。』

『なら、ナツミと行けばいいんっすね。』

『ああ。よろしく。』

『じゃ、あたし達も行くね。』

「もう少しで来るって。」

「今のはなんなんじゃ？通信用のラクリマでは無いみたいじゃが。」

そいやあ、通信用のラクリマって結構大きかったっけ？ま、適当に誤魔化しておくか。

「俺の魔法で作ったんだよ。」

また作ってギルドのメンバーにも渡そうかな？夕紀のおかげで通信機能は時計作ったら勝手に付くし。

「蒼影が使える魔法は、滅竜魔法だけではないのか？」

「ああ、霸天竜の滅竜魔法に重力操作がメインで少し他のが使えるくらいだな。」

「なるほど。ミラが動けなくなってたのはそういう事じゃったのか。しかし、どうして途中から動けたのじゃ？」

「ああ、普通は動けないはずが動けてたから、真面目に戦いたかったんだよ。」

ただ、今考えたら面倒だし重力で動けなくしたまま戦えば良かったと思うな。

「ミラ達と戦ってどう思った？」

「ん？結構強かったし、これからもちゃんと努力すればもっと強くなると思うけど。」

まあ、ミラ達からしたら何様だっと思われるかもしれないけどな。

「ふむ……。良かったのミラ、エルザ。」

「あ、当たり前よっ。」

「もちろんです。」

マスターはまゆき先輩達と一緒に来ていたミラとエルザに声をかけた。一緒にいるって事は、結構仲良くなったのか？てか、ミラとエルザは顔赤くしてるし。なんか照れるような事あったか？

「マスター、マーク入れてくれ。俺は右手でいいや。」

「わかった。」

「ナツミ達も同じ場所をお願いするさ。」

俺達は全員右手にマークを入れてもらい、俺は黒、まゆき先輩達は

白だった。

「何でわざわざ一緒の場所にしたんだ？」

「そんなの一緒がいいからに決まってるっす。」

「駄目だった？」

「いや、別に個人の自由だしな。」

「なら、気にしなくて良いから。」

それもそうだな。さて、鈴花、ナツミはもう消えてるな。鈴花は多分だけど、罨でも仕掛けに行っただろう。ナツミは魔法用の写真か？今は結構メンバー集まってるしな。

「メルディ、まゆき先輩行くか。」

「何処に行くの？」

「蒼影の事だし、適当に回るんでしょ？」

「まあな。さすがに外に行くつもりにはならないし。嫌なら別に個人でいいけど。」

「私は蒼影と一緒にいい。」

「あたしも何もする事ないからね。」

「んじゃ、適当にっして事で。」

明日にでもマスターに頼んで、家を買おうとするか。

やっぱり休める家は必須だしな。

「ねえ、蒼影。家買うつもりなんですよ?」

「そうだけど?」

「お金大丈夫?」

「ああ、メルディは心配しなくて大丈夫だ。(ナデナデ)」

心配しているメルディを撫でる。まあ、あんな森で暮らしてたんだし、金は心配だろうな。

「どれくらいの買うつもりなわけ?」

「そうだな。ま、二十人くらい暮らせる程度かな?こっちに来るメンバーもいるだろ?音姉やフィルとかさくらか特に。」

「確かにあるわね。でも、あるの?」

「多分な。」

まあ、なんとかなるだろうな。

歓迎パーティー（後書き）

これからの予定は、オリジナルのクエスト、ハッピー誕生かな？

それが終わったら、二人仲間になってもらいます。

初クエストへ

「よく見つかったっすね。」

ギルドに入って二週間くらいして、やっと二十人くらい暮らせる程度の家が見つかった。

「まあ、運が良かったって事だな。」

「そうっすね。それより、蒼影はギルドに行かないんっすか？ここ
の所ずっと借りてた所に籠もってたっすよね。」

「ああ、時計をな。鈴花達には渡しただろ？」

「ああ、マスター達に渡すのね。」

「ああ。前の世界より危険があるわけだしな。」

「もう完成したの？」

「ああ。まあ、今すぐ渡すって訳じゃないけどな。ギルドにはそろそろ行くよ。」

「なら、あたしと鈴花は依頼に言ってくるね。」

「ああ、頑張れよ、まゆき先輩、鈴花。」

「蒼影もね。」

「ナツミ達をよろしくっす。」

「わかってるって。」

今日からまゆき先輩と鈴花は依頼に行くんだよな。まあ、そこまで危険なクエストではないけど、時間がかかるんだよな。

確か一、二週間だったかな？ナツミも一度クエストに行ったんだよな。メルディは行こうと思えば行けたんだけど、俺と一緒にいるって言うて行かなかったんだよな。

俺もそろそろクエスト行こうかな。

「蒼影！俺と戦えー！」

ギルドに入ると、ナツが叫びながら俺に殴りかかってきた。……ギルドに入ったとたん戦えて。

「今度な。今眠いし。」

「グヘッ！」

重力操作で重力の向きと大きさを変え、ナツを壁に叩きつける。

「だっせーな、ナツ。」

ナツの後ろから来た 그레이が笑い、それに反応したナツが 그레이にキレル。

「うつせんだよ、 그레이。お前は黙ってる！」

「ああ？やんのか。」

「やってやるよ！」

始まったよ。何で二人共毎回喧嘩するかな？

まあいいや。二人共無視しとくか。

「二人共馬鹿みたい。」

「メルディの言うさ。リュウツチ無視して行くのさ。」

「そうだな。」

俺が止めなくても誰か止めるだろうしな。

「おはよう、蒼影。」

「リサーナか。今日はエルフマン達と一緒にじゃないのか？」

「別にいつも一緒にいるわけじゃないよ。」

まあ、それもそうだな。

「それより、マスター。なんか仕事ない？」

「お主は来た途端にそれか。」

「だってまゆき先輩達働いてるんだし、何もしないのは少し。」

「まあ、よいわ。あるにはあるが、一人では行くなよ。」

「何で？」

別に一人でも問題はないような気がするんだけど。

「一応じゃ。二、三人で行くようにな。」

ナツミは家の管理とかで残ってもらうか。なら、俺とメルディ、後一人誘ってみるか。仲良くなるために丁度いいし。

「ナツミは留守番頼むな。」

「分かってるのさ。その代わり、早めに帰ってきて欲しいのさ。」

「分かってるって。」

あの広い家に一人は寂しいだろうしな。まあ、俺がクエスト行かなかったらいいだけなんだけどな。

「さてと、後一人誰にするかな。」

「蒼影、私が一緒に行つてやるよ。」

「何を言っているミラ、私が一緒に行くに決まっている。」

いつの間にか話を聞いていたミラとエルザが、どちらが一緒に行くかで揉め始めた。

これどっち選んでも駄目だよな。

「エルザは仕事があつたじやろう。」

「そうでした……。」

エルザは行かないみたいだな。なら、ミラに頼むか。

「残念だったな、エルザ。ま、頑張れよ。私が「お姉ちゃん、お姉ちゃん明日約束は？」そうだった。明日はリサーナ達と約束があつたんだ。」

いや、妹達との約束忘れんなよ。ともかく、ミラとエルザは無理だから誰がいいか……。

ナツとグレイは却下だな。ナツは勝負勝負五月蠅いだろうし、グレイは脱ぎ癖がな。なら、レビィとカナのどっちかか。まずはレビィに頼んでみるか。

「そいえば、何のクエストなんだ？」

「洞窟内の魔物の討伐じゃ。」

洞窟か。なんか遺跡とかあつたら楽しいんだけどな。てか、洞窟なら尚更レビィがいいな。もし古代文字あつても、俺じゃ読めないし。まあ、あるとは思わないけど。

「メルディ、誘うのはレビィでいいか？」

「うん。」

「なら、誘ってくるか。」

レビイは……、いたいた。普通に本読んでるな。

「レビイなんの本読んでるんだ？」

「あ、蒼影。前買った冒険物の小説だよ。」

「面白そうだな。よかったら読み終わって貸してくれないか？」

「いいよ。でも、蒼影って本好きなの？」

「結構好きだぞ。なんかオススメあったら教えようか？」

「本当？私も何かあったら教えるね。」

レビイでこんな時から本好きだったんだな。

「ありがとう。」

「そういえば、蒼影私に用があったんじゃないの？」

「そうだった。レビイが良かったら俺とメルディとレビイでクエスト行かないか？」

「私が一緒に？」

「ああ、洞窟での討伐だったな。」

「討伐……。私はエルザやミラ達みたいに戦えないから……。」

レビイの魔法って、立体文字《ソリッドスクリプト》って言って文字を立体化させて意味を持たせる魔法だったよな。それ結構強いと思うんだけど、今は使えないのか？

「レビイは何の魔法使うんだ？」

「私は立体文字だよ。」

もう使えるみたいだな。なら、大丈夫か？もし使いこなせてないなら、少しは手助け出来るだろうしな。

それに、レビイはS級の試験にも選ばれてたし、大丈夫だろ。

「大丈夫だって。別にエルザ達みたいに戦わないといけないんじゃないんだし。それに、何かあっても俺が守るしさ。」

「……………うん。頑張ってみる。」

「ありがと、なら用意して行くうぜ。向こうで待ってるから。」

「うん、すぐ行くね。」

これで大丈夫だな。俺は特に準備ないしゆっくりしとくか。

「蒼影、出来たよ。」

「分かった。なら、先に外出といってくれ。メルディがいるから。」

「わかった。」

確か、機械召喚つてのでいろいろ作ったな。機械召喚は初めは面倒だけど、一度作ったら情報が記録されて、簡単に呼び出せるようにしたんだよな。性能とかいろいろ弄って何個か作ったし、移動に使うか。

まあ、ギルド出てすぐには無理だけど。

「んじゃ、マスター行ってくるんで。」

「気を付けるんじゃぞ。」

さてと、メルディとレヴィが待つてるし、早く行かないとな。

「お待たせ、んじゃ行くうぜ。」

「うん。」

「分かった。」

クエストの場所はつと。普通に行ったら約一週間くらいだな。移動の時間は機械召喚で作った分なら、かなり短縮出来るし大体三日か四日で終わるだろうな。

「それにしても、洞窟内の魔物討伐か。洞窟を壊さないように気を付けて戦わないとな。」

「そんな心配するのは蒼影だけだよ。」

「いやいや、ミラやエルザ、ナツだっているじゃないか。なあ、メ

ルディ。」

「うん……。でも、今は蒼影だけだよ。」

「それもそうだな。」

まあ、威力を抑えて戦えば問題ないだろ。後、範囲を絞って貫通力を上げるとかか。

「ねえ、クエストの場所まで時間かかるみたいだけど、どうやって行くの？」

「乗り物があるから、それで行くよ。これな。」

出した車をレビイに見せる。

「中に入っていい？」

「ああ、レビイも来いよ。」

「あ、うん。」

今出した車は、UXQ293。移動用に作った車で、外見より中が広く部屋が四つ着いている。ちなみに、名前は適当に思い付いたアルファベットと数字で決めた。

「蒼影、これなに？」

先に入ったメルディが聞いてきた。

「部屋だよ。四つあるから一人一つ使って良いぞ。まあ、明日には着くけど。」

「ウソ!? 普通二日くらいかかるのに。」

「結構速いからな。」

ちなみに、運転は必要ない。自動操縦《オートパイロット》っての作ってて、機械の操縦とかが自動になって、最適の行動を行ってくれるからな。てか、これ技能なのか? まあ、別にいいけど。

「蒼影、私ここがいい。」

「なら、私はここにしようかな。」

「了解。鍵はこれな。俺は向こうだから。」

部屋は、入り口の右に一部屋、左に一部屋で、廊下を挟んでもう一部屋ずつある。操縦席は一番前だ。

メルディは入り口の右、レビィは左を選んだ。俺はメルディの向かい側だ。

「鍵まであるんだ…。」

「後で行ってもいい?」

「別にいいぞ。」

メルディとレビィと別れて部屋に入ると、自動操縦を使う。

暇だし、なんかするか。

移動中の会話

「蒼影、入っていい？」

「ああ、いいぞ。」

そうだ、メルディもいるし技能作成《スキルメイク》でなんか作るか。メルディは知ってるから、アドバイスもらえばいいし。

「何悩んでるの？」

「ああ、新しい技能作ろうと思ってな。何かいいのないか？」

「幻覚とかは？」

「幻覚か。そいえば無かったな。幻覚ってどの系統なんだ？」

「幻覚は幻覚だと思う。」

「だよな、なら系統は幻覚、効果が相手の魔力を利用して幻覚をかける。にするか。その代わり、魔力が無くなったら解けるって事にするか。」

「名前はどつするの？」

「名前かー。毎回考え付かないんだよな。」

ネーミングセンスが無いだけなのかもしれないけど。

「なら、魔吸幻覚。」

「そうだな。それにするか。」

メルディが考えてくれた名前だし、俺は思い付かないし。

なら、名前が魔吸幻覚、効果が相手の魔力によって幻覚をかけるって事で作るか。

「よっし、完成つと。ありがとうな、メルディ。」

「うっん。でも、なんで小さく分けるの？全部に効果のあるのを作ればいいのに。」

「まあ、そうなんだけどな。ただ、効果強過ぎたら相手が少ない時困るかなって思ってたな。」

わざわざ一人相手に大規模な魔法を使うのも大袈裟だし、いくつも使い分けて戦った方がいいしな。まあ、実際は俺がそうしたいだけなんだけど。

「そうなんだ。」

「まあ、そのせいでとっさの時困るかもしれないけど。」

「その時は私が蒼影を守る。」

「ありがとうな。」

メルディを撫でながらお礼を言う。

「くすぐつたい。／＼／」

「ああ、悪いな。」

「蒼影、入っても良いかな？」

メルディと話していると、レビイの声が聞こえてきた。やっぱり一人は暇なんだろうな。本とか持ってきてなかったみたいだし、やる事ないんだろう。

「ああ、いいぞ。」

「おじゃまします。」

「どうしたんだ？」

「えっと、少し暇になって。後、聞きたい事があるの？」

暇つてのは予想道理だけど、聞きたい事？メルディいて大丈夫なのか？

「蒼影、私はもう戻るから。」

「ああ、さっきはありがとうな。」

「えっと……。」

「レビイ聞きたい事ってなんだ？」

「えつとね、何で私なのかなって思っで。」

「は？一体なんの事なんだ。」

「だから、なんでこのクエストに私を誘ったのかなって。」

私はミラやエルザみたいに強くないし、他の人に比べたら勝てる事なんかないし……………」

そんな事か。もう少し深刻な話なのかと思っただよ。

「別に理由なんかないぞ？」

「えっ？」

「ただ単に仲良くなりたいて、一緒にいたら楽しそうだから、誘っただし。」

それに強くないって言うけど、まだ子どもなんだし強くなくてもいいだろ。」

てか、普通子ども時はそんなに強くなれないだろ。エルザやミラは例外だけだ。

人には得意、不得意があるしな。

「レビイはレビイの得意な事を頑張ってたらいんだよ。まあ、苦手な事だから努力しないってのも駄目だけだな。」

レビイは古代文字が読めるんだろ？俺達が出来ない事が出来るんだから、ちゃんと勝ってる所だってあるしな。」

「でも、そんなのあまり役に立たないし。」

「てか、力っていつでも戦うための物だけじゃないんだしな。それに、レビイはミラやエルザじゃないんだから、違って当然なんだよ。世の中にはいろんな人間がいるし、いろんな依頼がある。」

その中には、エルザ達には出来なくて、レビイには出来るってのだけだ。ってあるんだよ。いつかレビイにしか出来ない事も出来るだろうしな。だから、今は悩まなくていいんじゃないか？」

てか、もしかしたら俺が誘ったのが原因なのか？

「でも、知識だけの私なんて必要とされないんじゃない？」

なんかマイナス思考だな。いや、俺が励ませてないだけか？

「んー、レビイはさ使いこなせてるじゃんか。古代文字を知ってるんじゃない、読めて意味も分かるんだろ？」

「少しだけ……。」

「この年で少しでも理解出来るなら十分だったの。」

それに、俺もミラ達だって最初から強かったんじゃないんだよ。頑張って努力して、壁にぶつかって挫折を経験して、壁を乗り越えていくのを繰り返してるんだしな。」

「うん……。」

「まあ、気の利いた事が言えなくて悪いな。」

「ううん。」

「ま、一人で駄目なら俺も手伝うから、一緒に頑張ろうな。」

「うん。」

「じゃ、話は終わりって事で。何か飲むか？」

「ううん、もう戻るよ。」

「そっか。んじゃな。」

はー、全く。気の利いた事くらい言えたらいいのにな。まあ、いいや。そろそろ着くみたいだし、準備するか。

まずは依頼主のいる町に行くか。依頼主は村長みただけど、村に被害でも出たのか？

「さて、ここまでだな。ここからは歩いて行くから。」

「わかった。」

「うん。」

レビイはなんか元気になっていた。まあ、ネガティブよりはいいか。

「止まれ！」

門番か？

「フェアリーテイルの人間だ！依頼を受けこの村に来た！」

「何？お前達がフェアリーテイルだと？まあ、いい。少し待ってろ。」

「

なんか感じ悪いな。やっぱりガキだからって舐めてるのか？ま、俺がこの村の立場だったら、あんな態度取りそうだししょうがないか。

「あなたがフェアリーテイルの方ですか？」

出てきたのは、三十代くらいの男性だった。もしかしてこの人が村長か？

「ああ、マークも入っている。」

その男性に、ギルドマークを見せる。

「確かに。私はこの村の村長です。詳しい話をしたいので、中へどうぞ。」

この人、本当に村長だったんだ。俺の中では、村長は年寄りってイメージなんだけど。てか、あんまり偉そうじゃなかったな。

「蒼影、行こう。」

いつの間にか先に行っていたメルディが俺に声をかけてくる。レビイも行ってるし。

少し進むと、他の家より少し大きいくらいの家があった。中は結構綺麗だった。ただ、本棚が多いな。

「んじゃ、依頼の確認なんですけど、洞窟の魔物討伐でいんですよ？」

「はい、ただ……。」

「何か問題が？」

「はい、実は最近洞窟に入れなくなっただんです。」

入れなくなっただけ？もしかして、結界かなんかが出来たのか？

「わかりました。それもこちらでなんとかします。」

「お願いします。」

「はい。メルディ、レヴィ行くぞ。」

結界みたいな物か。レヴィがいるし、なんとかなるだろうな。

「さてと、明日から始めるけど、多分レヴィの力を借りるからな。」

「ええっ！わ、私が？」

「ああ、あの村長が言っただのは、術式とかみたいな物だろし、そういうのはレヴィが適任だからな。」

まあ、その質によるかもしれないけどな。あまりにも上手く作って

るなら、今のレヴィには出来ないかもしれないからな。

「ねえ、私は？」

「メルディには洞窟内の構造を調べてもらったりと、いろいろあるから。」

メルディなら風を操れるし、それで道とか調べれるからな。

「わかった。」

「他にもあるかもしれないけど、今は決めなくて良いだろ。俺は少し村回るから、先に休んでてくれ。」

さつき村長から泊まる場所は貸してもらったからな。

「蒼影はどうするの？」

「適当にな。ま、すぐ行くから。」

まずは、どれくらいいるか把握したいんだけど、無理だと思うから村の人がどれくらい見たか聞いてみるか。

結構見た人いるみたいだし、すぐに情報が集まるだろ。

「お帰り、蒼影。」

「ああ、ただいま。」

村で聞いた情報だと、魔物は十くらいみたいだな。後、魔物は中型みたいだ。

「どうだった？」

「何もなかったよ。情報は入ったけど。ま、後で言うよ。」

明日はさっさと片付けてくるか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2247ba/>

転生して異世界廻り～FAIRY TAIL編

2012年1月14日15時07分発行